

〔コメント〕

もうひとつの〈地域変換法〉

——関戸明子報告によせて——

島津俊之

I. はじめに

関戸報告「民俗資料による村落の環境利用に関する分析」は、筆者の言葉を使えば、おおよそ以下のような三つの部分から構成されていた。すなわち、①日本民俗学における〈民俗資料〉概念の検討、②土地台帳・地籍図・聞き取り調査による昭和20年頃の一村落の土地利用状態の復原、③複数村落における、土地台帳・地籍図・地形図に基づく小字界および小字地名分布の復原、およびそれらの村落間での比較、という三部分である。

本稿では、こうした関戸報告に対する筆者のコメントを、シンポジウム当日は時間の制約上言及できなかった部分も含めて、四点にわたって述べてゆきたい。ただし筆者の諸コメントは、関戸報告の上述の三部分に必ずしも逐一对応したものではないことを、あらかじめ断っておく。

II. 土地台帳や地籍図は〈民俗資料〉か

関戸氏は報告のなかで、日本民俗学における〈民俗資料〉の概念を検討し、和歌森太郎¹⁾や西垣晴次²⁾らの概念規定を参考にしつつ、地域住民によって集合的に伝えられてきた有形無形の伝承を民俗資料とし、それが歴史的・地理的特殊性をもつ点を重視した。また関戸氏は、何が民俗資料となりうるかは研究者の研究目的いかんによるという〈相関的〉な立場を明確にしている。これは、ある意味で妥当な認識として評価することができよう。しかしいくぶん問題なのは、関戸報告のなかで、氏のいう〈環境利用〉復原に利用された土地台帳や地籍図が、議論抜

きで〈民俗資料〉とみなされていると思える点である。

この点がなぜ問題なのか。それは、民俗資料という言葉の慣習的語義と、土地台帳や地籍図のもつ本来の性格との間に、微妙なズレが存在するからである。慣習的に〈民俗〉という言葉は、歴史学が好んで扱ってきた〈支配〉とか〈権力〉の側面ではなく、いわゆる〈常民〉の生活をさすものとして用いられてきた。ここでは、民俗という言葉が、分析的に創出された〈常民〉なるカテゴリーに結びつけられたことそれ自体が重要である。こうして〈民俗資料〉も、一義的には常民の生活に関わる資料ということになる。

しかし、土地台帳や地籍図はどうだろうか。これらは、近代の始まりとともに、常民ならざる〈権力〉側の人々が、国土把握のために作成したものではなかったか。それらに記された小字地名や小字界とは、常民の主体的営為の産物であるのみならず、国家から在地の役付層に至るまでの、多層的な〈権力〉の産物でもあるはずである。断っておくが、筆者は土地台帳や地籍図が民俗資料に非ずなどといったいわけではない。土地台帳や地籍図の本来の性格や、民俗資料という言葉の慣習的語義について、もっと敏感であるべきだといいたいのである。土地台帳や地籍図を民俗資料として使いたいのであれば、最低限の資料批判は不可欠だといいたいのである。

III. 〈土地利用〉と〈環境利用〉の間

関戸報告では、〈環境利用〉という言葉がひとつのキーワードとなっていた。具体的には、土地台帳・

地籍図・聞き取り調査によって復原された一村落地の土地利用状態が、〈環境利用〉として言及された。また、土地台帳・地籍図・地形図によって復原された小字界、および小字地名の接頭尾辞の分布が、環境利用のあり方を探る手がかりとみなされた。

筆者の考えでは、関戸氏が〈環境利用〉として言及する事態は、基本的には〈土地利用〉というコンヴェンショナルな術語で表現可能なものである。土地はもちろん環境の構成要素であり、土地利用状態を環境利用と呼ぶことが間違っているわけではない。しかし一般に〈環境〉という場合、そこには土地や自然環境のみならず、人間環境あるいは社会環境も含まれてくる。したがって環境利用という言葉には、土地や自然環境の利用だけではなく、人間環境あるいは社会環境の〈利用〉という意味も当然含まれてくるのである。環境利用という言葉は、土地利用という言葉にくらべて、はるかに包括的な上位の概念なのである。

したがって、とりあえずここで問われるべきは次のようなことである。すなわち、包括的な〈環境利用〉概念を使うことによって、〈土地利用〉概念では把握できないような、いかなる事柄が把握できたのかということである。あるいは、環境利用という言葉を使うことで、いったい何がみえてきたのかということである。この点について、いまいし熟考が必要だったのではないだろうか。

もっとも、今回のシンポジウム共同課題が「環境と歴史地理」であったことからすれば、関戸氏が〈環境利用〉の言葉にこだわったのは、やむをえなかったのかもしれない。そうすると今度は、「環境と歴史地理」なる共同課題設定を含めた、シンポジウムのあり方それ自体がコメントの対象になってくるが、それは本稿の任務を超えた仕事というべきであろう。

IV. 小字地図からわかること

土地台帳・地籍図・地形図から復原された小字界、および小字地名の接頭尾辞の分布に基づいて〈環境

利用〉のあり方を考察するというのが、関戸報告における経験的分析のひとつのテーマであった。ここでは複数村落の事例をもとに、小字界が居住域では細分化される傾向にあることが指摘され、それは住民の環境利用の密度を反映したものであることが示唆された。また、小字地名の接頭尾辞の分布図からは、ムラ人が〈環境〉の特徴を巧みに捉えているさまが読み取れるというのが関戸氏の主張であった。

このような考察は、環境という言葉を〈土地〉の意味に解するならば、また土地台帳や地籍図の慎重な資料批判を経たものであるならば、それ自体としてはおそらく妥当なものであろう。ただ、関戸報告のなかで呈示された何枚かの地図を熟視してみると、筆者にはどうしても次のような感想が浮かんでしまう。

そのひとつは、〈環境利用〉の密度が非居住域よりも居住域において高くなるのは、ある意味で自明の事柄ではないかということである。人間の往来は、非居住域である山林よりも、居住域やそれに隣接する耕作域に集中することは明らかである。人間の往来が相対的に集中する領域というのは、人間生活に相対的に密着した領域、つまり人間によって高密度に〈利用〉されている領域である。そこに、より多くの地名が付与されるのは当然ではないだろうか。とはいえ、自明と思える事柄であっても、それを経験的データで示すことが無意味だというつもりはない。小字界の地図は、この種の経験的データとしての意義は有するであろう。

もうひとつは、小字地名の接頭尾辞の分布図についての感想である。この分布図には、「山」「谷」「野」「窪」「田」「畑」「藪」「峰」「迫」などの接頭尾辞の分布が示されている。これらの接頭尾辞は、確かに土地の形状あるいは状態が巧みに捉えられていることを示すデータであろう。しかしよく考えてみると、日本人なら山は「山」と呼び、谷は「谷」と呼び、野原は「野」と呼び、窪地は「窪」と呼ぶだろうし、そうした接頭尾辞が分布するのは、やはり自明の事

柄に属するのではないか。極端ないい方をすれば、ムラ人であろうとなかろうと、日本人ならそれくらい巧みさは持ちあわせている（いた）のではないか。とはいえ、それらの接頭尾辞には、自明のことではない〈隠された意味〉が潜んでいるのかもしれないし、そうした意味を説得的に呈示できるのであれば、それはそれで有意義ではあろう。

V. 〈地域変換法〉の有効性

関戸報告のなかで、複数村落の事例が示されたのは、千葉徳爾³⁾が呈示する〈地域変換法〉を参考として、環境利用の比較を試みるためであった。千葉のいう地域変換法とは、筆者の理解では、あらかじめ特定の民俗事象（例えば民俗地名の分布状態）を従属変数とし、それに影響を与えそうな事象（例えば生業）を独立変数と指定し、地域を〈変換〉（すなわち比較）することにより、独立変数と従属変数の共変関係を確認しようとする因果分析の方法である。これは具体的には、例えば稲作山村と畑作山村における民俗地名の分布状態を比較して、民俗地名の分布状態の両地域における差異を、両地域の生業の差異（稲作か畑作か）に還元できるかどうか検討する、といった手続きでなされる。筆者の理解では、関戸氏のとった手続きはだいたいこのようなものである。

ここで問題となるのは、関戸報告における〈地域変換法〉の有効性である。地域変換法とは、つまるところ一種の二変量解析である。厳密にいうと、かかる二変量解析では、変換（＝比較）する地域のなかで、独立変数と従属変数を除いた他の地域的諸条件を同一にする（すなわち、パラメーターを設定する）必要がある。そうしないと、従属変数値の変動を独立変数値の変動に還元できない可能性が生じてしまうからである。

この点に関して、千葉は変換（＝比較）する地域のスケールを同一にすることを求めている。しかし関戸報告のように、愛媛県面河村大成と福井県今庄村杉谷といったまったく異なった地域の山村を比較

する場合、スケールを同一にするだけで、はたして生業と民俗地名分布以外の地域的諸条件を同一にしたことになるのだろうか。このケースでは、パラメーターの設定はきわめて困難な作業といわざるをえないのである。

また、関戸氏は生業と小字地名の関連性に言及したが、稲作山村には「田」などの稲作関連の接頭尾辞が多く分布し、畑作山村には「畑」などの畑作関連の接頭尾辞が多く分布するといったことであるならば、〈稲作山村には田んぼが多く、畑作山村には畑が多い〉と言明するのとさして変わらないのではあるまいか。この場合、地名は、〈生業〉という変数とほとんど同義なのではないだろうか。

〈地域変換法〉という言葉から、筆者はむしろ、千葉が呈示したものはまったく別の学問的プラクティスを想起する。あらかじめ用意された研究フレームに、研究対象地域を次々と〈変換〉して当てはめてゆき、具体的な研究手順は少しずつ変えながら、論説を生産してゆくという学問的プラクティスである。かかる所行が、時としてなかば無自覚なままに実践されてゆき、「学会誌にときどき載る、場所を変えただけで視点・方法さらに結論まで同じキンタロウアメのような研究」⁴⁾が世に出ることになる。〈地域変換法〉という言葉のこうした含意に、はたして関戸氏は気づいていただろうか。

誤解のないよう言い添えておくと、筆者はこうした学問的プラクティスをネガティブにのみ捉えているわけではない。個々の地域における事例研究の成果が体系づけられ、新たな知見として結実するのであれば、それはそれで有意義なことだと思うからである。

VI. おわりに

筆者には、言葉や概念に過剰なまでにこだわってしまう性癖がある。本稿でのコメントも、関戸報告で使われた言葉にこだわるあまり、やや揚足とりめいた物言いに終始してしまったようだ。また、口頭

発表に対するコメントという性質上、関戸氏の意図を誤解（あるいは曲解）してしまったのではないかと恐れている。これらの点をどうかお許し願いたい。何よりも、筆者の小むずかしいコメントによって、関戸氏の精力的なフィールドサーヴェイの成果それ自体が損なわれるわけでは決してない。この点を最後に確認して、コメントを終わりたいと思う。

（東京都立大学理学部）

〔注〕

- 1) 和歌森太郎 (1963) : 民俗資料の歴史学的意味, 東京教育大学文学部紀要 (史学研究) 41, 1~24
- 2) 西垣晴次 (1975) : 地方史と民俗資料 (西垣晴次編『民俗資料調査整理の実務 (地方史マニュアル⑦)』柏書房) 1~9頁。
- 3) 千葉徳爾 (1979) : 日本民俗学の研究方法における二、三の問題について——地域変換法を中心に——, 歴史人類 7, 85~117頁。
- 4) 内田忠賢 (1994) : 地域イベントの展開——高知「よさこい祭り」を事例として——, 地理39-5, 92頁。